

第7回 ESD 社会科理論研究会概要報告

◇開催日時 平成29年3月30日17時～20時

◇会場 中澤研究室

◇参加者 河野、中澤哲、新宮、中澤

◇内容

第8章「初等教育における歴史科の目的」担当：新宮先生

・歴史教育の意義

一個の間接の社会学

社会の生成の過程と組織の様式をあきらかにするところの社会研究

・歴史は結果あるいは影響の集積の単なる叙述ではなく、力動的で運動的なものとして経済的・産業的側面から扱うべき

問題解決の過程が歴史の中に見ることができる

こちら側の見方が変化することで歴史解釈が変わっていく

歴史をその変容や影響、原因などトータルに把握させる

営みに着目するという事

最終的に生活に戻すことが大切

・協働することの大切さ（小さな力を集めることで実現不可能と思われていることもできる）

・国際理解・国際協調の大切さ

・倫理観

・歴史を学習するという事は、知識を蒐集することではなく、知識を使用するという事

・軽重をつけて指導する必要性

地域性、ドラマチックに時代が変わるところ

・人類はいかにして生活するか

一般人の歴史：道具の変遷、生活様式の変遷 ←自然環境・社会環境の変化への対応

現在の環境にふさわしい生活とは何か

・英雄の活動・伝記 ← その行動を誘発した社会的状況を把握させることが重要

・典型的な社会事象を取り上げる

・デューイのよる歴史学習の3つの時期

子どもの社会活動に対する洞察と共感にあたる目的の歴史：道具

明確な意義を持ち、全世界の歴史に果たした貢献：ヨーロッパとアメリカの結びつき

年代的な順序

『学びとは何か』今井むつみ 2016年、岩波書店

今日から、新しい研修方法を取り入れた。要点・中心をつかむため、『学びとは何か』をテキストとし、1章ごとに、各自が「大切だ」と感じた箇所を抜き書きして持参し、互いの抜き書き箇所を比較する。この学習を通して、話題の中心をつかむ力を高めることは、日々の学習指導、特に児童相互の対話を促す場面で活用できる。児童の発言は、時として要領を得ない、まだ考えが固まっていないものも多い。それをそのままにしていると、児童の考えは拡散したままであり、それを聞く児童は、要点をつかむことができず、対話の糸口すら見つけることができない。考えがまとまっていない児童の発言から、児童の意見の中心を把握し、それを端的に表現することで、児童は自分の頭の中を整理する契機となり、他

の児童にとっては、対話の糸口を見いだせる。

さらに、各自の抜き出し個所の重なった部分から話題を広げ、教育について考えを深める契機とする。

○第1章の抜き書きの重複部分

「頭で知っているだけの知識」は「使えない知識」、「体で覚えた知識」は「使える知識」と深くかかわっていることがわかる。 p.33

- ・「知識」には「事実の知識」と「手続きの知識」がある。事実の知識だけでなく、手続きの知識と融合させることで、「使える知識」とすることができる。
- ・「使える知識」とは、活用型の知識であるといえる。様々な問題の場面において、どれを使うことが効率的な問題解決に至るのかを直観的に判断するときの材料となっているのが「手続きの知識」である。
「以前、こういう場面では、あのやり方でうまくいった。今度はこのやり方がいいだろう。」
- ・次期学習指導要領で指摘されている「知識・技能」とは、「事実の知識」と「手続きの知識」のことだ。
- ・ここで各教科で習得することが期待されている「知識」は、個々の知識というよりも、「構造化された知識」である。構造化された知識というのは、因果関係によって結びつけられた知識のネットワークである。
- ・個々の単元において習得した構造化された知識の蓄積を通じて、教科の特性に即した「見方・考え方」が養われる。その各教科特有の「見方・考え方」を、教科横断的な学習を行うことで、融合・統合が促され、より豊かな多様な事象にうまく対応できる見方・考え方を養うことができる。さらに、ESDのような現実の社会に関わる学習を行うことで、「社会で役に立つ見方・考え方」の育成ができる。
これが、次期学習指導要領の要点である「社会に開かれた教育課程」の必要性・意義であろう。

